

先人たちが切り開いた豊かな里山

北牟婁郡紀北町 下河内

紀北町の最北端に位置する下河内は、四方を山々に囲まれた小さな集落です。一見すると、のどかな里山ですが、実は長年にわたって原野を切り開いた苦難の歴史が刻まれています。

先人たちの努力の結果、豊かな農村集落に生まれ変わった下河内ですが、近年は過疎・高齢化が急速に進みます。そこで、下河内の豊かな自然、昔ながらの知恵や伝統などを守り伝えるため、平成15(2003)年に結成されたのが「下河内の里山を守る会」。毎月第2土曜日開催の「下河内の日」には、旧旅籠を活用した「そば蔵旭屋」で、そば打ち体験が楽しめるほか、地元食材を使用した料理を味わうことができます。

今回は、散策に加えてそば打ち体験も堪能します。

取材・文：中村真由美

旅籠の面影残す「そば蔵旭屋」

下河内に行くには、紀北町内を横断する国道422号線を北西に向けてドライブするとよいでしょう。所々に立つ看板を道案内にして進むと、やがて風情のある古民家が姿を現します。今回の散策の基点「そば蔵旭屋」です。日当たりのよい長い縁側に腰を下ろせば、ゆったりとした時の流れに身を委ねた



築約130年を誇る「そば蔵旭屋」



「下河内の里山を守る会」の皆さん
(手前向かって左から南崎 和子さん、橋本 三保さん
奥向かって左から北村 伊都子さん、新居 裕子さん
新居 成介さん)

くなります。また、庇の下(ひさき)の雁木(風雨除けのために設置された板)に、全国でも有数の多雨地帯ならではの知恵と工夫を感じます。

「ここは、元々は旅籠『旭屋』でした」と教えてくれるのは、「下河内の里山を守る会」会長の橋本 三保さんと、会員の南崎 和子さん。同家に生まれ育った南崎さんによると、明治時代から昭和初期のころまでは、池坂峠を越えて現在の太田町へと往来する人々で大変賑わっていたといいます。紀伊長島方面

からは塩や魚が、大杉方面からは、炭や木材などが盛んに運ばれました。また当時は、木材などを運搬するトラック列車も走っていたと教わりました。

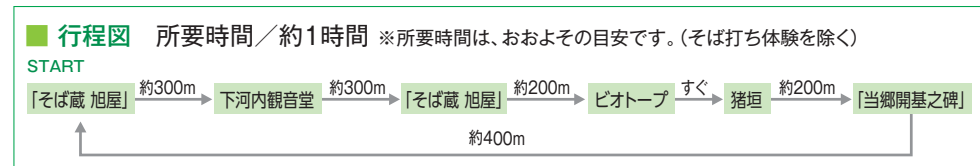
現在、池坂峠へと続く道は通行止めですが、旅人や商人をもてなした旅籠は、「下河内の里山を守る会」の活動・交流拠点となっています。会員数は現在約20名。いずれも下河内を愛する人で、中には町外在住者もいると伺いました。

そば打ち体験を満喫

旅籠周囲の話を伺っている間に準備が整い、そば打ち体験がスタート。この日指導してくれたのは、そば打ち達人の新居 成介さんです。国産の小麦粉とそば粉に水を加えながら、こね鉢の中でリズムカルに手を動かす水まわしの工程を見学していると、時折、爽やかな香りが漂います。徐々にしっとりとした状態に変化すると、練りの段階へ入ります。想像以上に固く締まった



美しい里山の風景が広がる下河内



至紀伊長島IC



ビオトープ



先人たちが築いた猪垣



「当郷開基之碑」

問 紀北町商工観光課
TEL 0597-4613115

ざします。すると、その手前にビオトープが見えてきました。トンボやメダカなどを呼び込むために「下河内の里山を守る会」の皆さんが整備したもので、この日は、可憐な黄色い花が少し咲いていました。これは、スイレン科のコウホネで、毎年初夏から初秋にかけて花を咲かせます。

そして猪垣は、ビオトープのすぐ近くに続いていました。猪垣に沿って散策路が整備されています。現在、長さは約1650メートルですが、かつては集落全体を囲んでおり、オオカミ・イノシシ・シカなどの獣害から人々を守ってきました。各民家の石垣が高く頑丈に積まれていたのも同様の理由なのです。ところで、これほど大量の石はどこから運んできたのでしょうか。実は、開墾した際に出てきた石を利用したのだと教わります。のどかで豊かな集落を維持するための先人たちの知恵と労力を思うと、胸が熱くなるのを感じます。

最後に立ち寄ったのは、「当郷開基之碑」です。開拓の祖・中村久之丞の業績を称えるため、明治17(1884)年に村民たちが立てた碑で、側面には、開拓の経緯に加えて村が豊かになったことを喜ぶ話なども刻まれていました。

林の中にひっそりとたたずむ碑に手を合わせた後は、再び「そば蔵旭屋」に戻って散策は終了です。なお、そば打ち体験は、事前の予約が必要ですので、ご相談ください。毎月第2土曜日開催の「下河内の日」には、予約なしでも体験可能です。一度訪ねれば、下河内ファンのなることでしょう。

開墾の歴史をたどる

そば打ち体験を満喫した後は、開墾の歴史について話を伺います。それによると、赤羽川上流域の旧十須村の人々が、天明8(1788)年の川の氾濫

で田畑を流失したことに始まります。窮地の中、立ち上がったのが村民の中村久之丞。久之丞は、村の北側に広がる原野の開墾を思い立ち、庄屋たちの協力を得て、紀州藩に開墾許可を願い出たのです。文化11(1814)年のことでした。許可を得た久之丞たちの労苦の結果、江戸時代末期には熊野地方きつての富裕な農村集落として知られるまでになったのです。

お話の後は、開墾の歴史を偲ぶ場所、下河内観音堂・猪垣・「当郷開基之碑」

そばの塊を大きな饅頭のようにまとめた後は、のし棒を使つての各工程を経て、そば切りへと進みます。ここまで要した時間は1時間以上ですが、各工程が楽しいため、あつという間に終了です。リピーターが多いというのも納得です。



そば打ちを指導する新居 成介さん



各工程を丁寧かつリズムカルに行う新居さん



下河内観音堂

を巡ります。まずは「そば蔵旭屋」から北へ続く集落内を歩きます。目前に迫る山々の雄大な景色や、各民家の見事な石垣などを眺めながら5分程度歩くと、下河内観音堂に到着です。

同観音堂が建立されたのは、開墾作業が一段落した天保年間(1831-1845)のこと。堂内には、石造聖観音像が安置され、人々を見守り続けています。

参拝した後は、一旦「そば蔵旭屋」へ戻り、次は東へ方向を変えて猪垣をめぐります。